

老舍『四世同堂』試論

渡 辺 武 秀

On Lao shê (老舍)'s "Si shi Tong Tong (四世同堂)"

Takehide WATANABE*

概 論

这篇《四世同堂》是老舍写的长篇小说。在这部作品里，老舍详细地描写出抗日战争时期的北京，北京人，北京人的生活，日本军队的残酷、暴行等。

这次，我想通过分析作品里的两种描写来理解老舍的创造意图。第一种是老舍作品里描写战争以前的北京四季，风俗习惯的部分。第二种是老舍用“笑”的方法描写登场人物的部分。

- (1) 这篇《四世同堂》里的北京四季特色，风俗习惯的描写非常精彩、生动。我们读者读了这些，就会感觉到以前的北京是非常美丽，非常热闹，非常快乐，就好像是乐园一样的地方。但是，在这个部分的后面，我们能注意到，老舍继续写下去的是日本军侵入北京以后的情景。这个情景里，一点美丽，热闹，快乐的因素都已经没有了。读者读了这些，会觉得痛苦、悲哀，从而愤恨日本军队侵入北京。因此，我们可以理解，老舍的意图是采用这种描写方法来引起我们读者的感情共鸣。于是，我们能了解到，作品里的北京四季特色，风俗习惯的描写就是为了表现出日本军的残酷、暴行而使用的。
- (2) 我们有时看到某小说的某部分，哈哈大笑起来。为什么我们笑起来呢？这是因为作者采用某种办法使我们笑起来。在这个文章里，这样的描写办法我叫做“笑”的方法。在老舍的以前的作品里，我们也能看到采用这样“笑”的方法来写文章。这篇《四世同堂》也有一些地方采用这个方法。我们可以注意到，用“笑”的方法来描写的对象是“汉奸”。那么，老舍采用这个方法来表现出“汉奸”的什么呢？老舍表现出的就是“汉奸”的思想、品德的缺点。他们为什么走“汉奸”的路呢？因为他们的思想、品德里有很多缺点。这些缺点导致他们选择走“汉奸”的路。于是，我们能了解到，在这个作品里，老舍的意图是用“笑”的方法来让我们看清楚他们的思想、品德里的缺点，而这些缺点里有很多“笑”的因素。

Key words: war, Japanese, Bei Jing

はじめに

この作品は日中戦争時の北京の一角にある「胡同（横町）」に住む様々な階層の人々，特に「四世同堂」である祁家の家族を中心に，その時々にかかる事件，人々の生活の様子を描ききった，『惶惑』『偷生』『飢荒』の三部からなる大長編小説である^(註1)。この作品を，波多野太郎氏は以下のように評価している。

（この作品は…筆者）舞台を中国の伝統文化を代表する北京におき，四時のうつりかわりと歴史的生活から民族戦争の推移と性格を記述

し，戦争と生活をぴったり配合させていること，題材の中心となっている祁家の相異なる四つのゼネレーションの民族戦争における生態，思想の相違と生活における融合，祁老人の歴史生活による戦争の性格の把握と思想の変遷を述べていること，出て来る事件，たとえば特使の暗殺とか，中国人に対する北京大学の監獄における拷問など，ことごとく事実であり，決して幻想的な宣伝的なものではなく，素材を丹念精密に探っていること…(略) …など，色々の特長があげられ，八年にわたる中国民族戦争の一大記念碑^(註2)といって過言であるまい。

平成 15 年 12 月 19 日受理

* 総合教育センター・助教授

筆者は，これまで老舍の種々の作品を，老舍

作品のきわだった特徴である「笑い」がストーリーの流れの中でどのような作用をし、どのような効果を上げているか、或いは老舎は後に「笑い」のない作品も書くのだが、この作品がどのような形で「悲劇」に作り上げられているのかを考え、老舎が作品に込めたメッセージを読み取ることを試みてきた^(註3)。この『四世同堂』も当然ながらこのような要素が充分含まれていると思われる。

そこで、この小論では、最初に『四世同堂』に描かれている北京の季節、風俗などと、作品内容とがどのように関連しているのかを考え、その後で、この『四世同堂』に作者が明らかに読者を「笑わせよう」している表現がある^(註4)ことに注目し、作者はこの作品で「笑い」を用いて何を、どのように描き出そうとしているのか、といったことを考えてみようと思う。

—

すでに述べたように、この『四世同堂』は日中戦争を扱っており、出てくる事件は極めて悲惨であり、この舞台になっている北京は荒廃し、ここで生活している住民は飢えに苦しんでいる。このような内容の中に、のどかなで、楽しい「四時の移り変わり」が描き込まれているのである。この「四時のうつりかわり」の描写は前掲の波多野氏の論文の中でも高い評価を受けていた。確かにこの作品の中にこういうものが点在しており、その描写が光彩を放っているのである。

そこでまず、この小論では、何故このような「四時のうつりかわり」の描写があるのか、これらがこの作品内容にどのような関わり、作品でどのような効果を上げているのかを考えることから始めたい。

周知のように、日本軍は、1937年7月7日の盧溝橋事件後、直ちに北京に入城し、日本が敗戦するまでの八年間に渡って、この北京の様々な場所で、様々な種類の横暴で、残酷な振る舞

いを行ない、中国人に物質的、精神的な面とてつもない損害を与えた^(註5)。この『四世同堂』に描かれているのがこのような日中戦争時期の八年間にわたる北京であるということ、あるいはまたこの作品の読者が中国人であることを想定して書かれているということから考えれば、この作品で、作者が、種々の方法で、様々な方向から、日本軍が行った残虐で、不当な行為を描き出そうとすることになるのはいうまでもないだろう。そして、この結果、読者は、この作品を読んで、驚くべき日本軍の横暴さ、残酷な行為を知ることになり、このことによって日本軍を激しく憎悪することになるはずである。

だが、作者の表現の仕方は、基本的には事実を事実とする姿勢に基づいているとはいえ、それでもなおこの作品そのものは小説という一つの文学創作であるからして、ある日本軍の残虐な行為を表現するにも、やはりその作家独自のものは存在していると考えるのが自然であると思われる。しかも、たとえ同じ作品であっても、そのような表現方法は一通りでなく、いろいろあるはずである。

日本軍の残酷さ、不当性といったものを表現する方法ということで、まず目に付くのが、日本軍が行った行為そのものを作者が実際に見た、或いは体験したかのような形で表現する方法であろう。この方法はこの作品でもしばしば用いられている。例えば日本の憲兵が銭黙吟という老人を監獄に連行し、拷問を加えるといった場面のそれぞれ^(註6)、或いは、瑞宣も日本の憲兵に逮捕され、監獄につながれるのであるが、瑞宣の、獄中で遭遇した一つ一つのシーン^(註7)、或いは日本軍人と漢奸が実直で、誇り高い瑞宣の父親の天佑に因縁を付け「私は漢奸商人です」と叫ばせながら、市中引き回し、この屈辱のために、天佑は川に身を投げて自殺してしまうストーリーの場面の数々^(註8)等が、まさにそうである。

だが、ここで指摘しておきたいのは、この表現方法ではない。それは、そのような日本軍の

残虐な行為そのものを描かずに、むしろ逆に平和な時代の北京の素晴らしい光景、風物をふんだんに描き出すことで、日本人の残酷さ、日本人の不当な行為を効果的に知らしめる手法を使っていると思われるところである。これが、すでに冒頭で述べた「四時のうつりかわり」の描写の部分に関わるのである。

例えば、少し引用が長いが、以下のような文章が「四時のうつりかわり」の描写である。この部分は全部のほんの一部分で、実際には、このような描写が、五ページ余りに渡って続いてゆく。

世の中が太平だった頃、北京の夏はとても愛すべきものであった。十三陵のサクランボが市場に出始める頃から、杏がわずかにピンクに色づくまで、これが一シーズンの、果物の歴史である。——ほらご覧なさい、青い杏がタネもまだ硬くなってないのに、もう拳ぐらいの大きさの蒲の籠に入れられ、「水飴」と一緒にお嬢さんや子どもたちに売られている。ゆっくりと、杏のタネが硬くなってきているが、まだ青いのを物売りたちが次々に「大皿の、でかい杏だよ！」と大声を張り上げる。この売り声を聞いて、小さい男の子や女の子は酸っぱい涎を流し、老人たちはすでにぐらぐらしている歯をちょっと撫でて、ただ苦笑だけだった。暫くして、ピンクがかった、半青半赤の「在来種」の杏が市場に出てくる。そうすると売り声も音楽みたいになり始める。まるで果物の紅い美しさが物売りに靈感を与えるみたいに。その後、いろいろな杏が市場に出てきて競争になる。大きくて真黄色のやつ、小さくて鮮やかに紅いやつ、皮はざらざらで味が濃いやつ、タネは小さくてあっさりしているやつ——これはタネの中の実まで甘かった。最後に、あの有名な「白杏」が薄い紙に包まれて市場に出てくる。まるで大器晩成みたいに杏の季節を締めくくることになる。杏がまだ終わりきらないうちに、小さい

桃がすでに紅い口をゆがめてこれに取って代わろうとする。杏がなくなってしまうと、いろんな桃が、丸いのやら、歪んだのやら、血のように紅いのやら、全部緑のやら、薄緑に紅い背骨がついているのやら、硬いのやら、柔らかいのやら、大きくて水分の多いのやら、小さくてカリカリしているのやら、こんなものが、みんな北京にやってきて、人々の目、鼻、口を楽しませてくれるのである^(註9)。

この部分は太平の頃の北京の夏の様子を描いたものである。

もちろんこの部分だけでも十分に鑑賞に堪えうと思われる。だが、もしかしたら、このような文章は或いは単に作者の郷愁、回顧として、北京のこの季節のすばらしさが長々と書き連ねられているだけと見なしてしまうことも起こりうるかもしれない。ところがこのような文章を作品全体の流れの中でよく観察してみると、ある種の効果的な作用をしていることに気づかされるのである。

この作品は日中戦争下の北京が描かれているのだから、全体的に暗く沈んだ雰囲気場面が多い中であって、このような文章の出現は、ひととき鮮やかで、まず間違いなく読者の目を引くことは疑いない。この目に鮮やかな部分は「平和な時期の北京の夏」がまさしく微に入り細をうがつよう描き出されており、その描き出されたものは、ほぼこの世の「ユートピア」ではないかとさえ思われるものにできあがっている。だから、北京を知っている読者はいうまでもなく、たとえ実際には知らない読者であっても、嘗て存在した北京の素晴らしさをまざまざと脳裏に思い浮かべ、身も心もすっかりこの作者が描き出した北京の中に入り込んでゆくことになると思われる。

ところがこのような文章が五ページほどにわたって書かれた後、つまりすっかり作者の描き出した北京に読者の気持ちが入り込んだ後、

しかし、しかしながら、今年の、この夏はただ暑いだけでなんにもほかに良いところはなかった。祁老人は自分の草花を失い、自分の平静さを失い、天王殿で浪曲を聴くという興味を失った^(註10)。

という具合に、今度は現実の、日本軍に占領されている「荒廃した」北京の様子が書き継がれて行くのである。

前掲の引用文のような北京と、日本軍が北京に入った後の北京との落差はとてつもなく大きい。この時、読者は、「ユートピア」の北京から占領下の「荒廃した」北京に引きずり降ろされ、大事なものを失ったという強い喪失感に襲われる。この心理状態は、必ず、日本軍に対する憤りに繋がって行くことになる。というのは、この素晴らしい北京を荒廃させ、中国人民を苦しめているのは「一体誰だ」というような責任追及の感情が必ず起こるはずだからである。ここに、日本軍に対する激しい怒りが凄まじい勢いで沸き上がってくるのである。

このように考えると、作品における「四時のうつりかわり」の描写が何故この作品に必要なのか、そしてこの描写がこの作品でどのような効果を上げているのかがはっきり理解できるのではないか。

つまり、この描写の目的は、日本軍の残酷さ、不当さを描くことにある。この方法として

かつての北京の四時 ⇔ 現在の北京の四時

という対比を使っているのである。この際に、「かつての北京の四時」が素晴らしいものであればあるほど、「現在の北京の四時」の悲惨さがきわだってくる。この表現を用いる場合、「かつての北京の四時」をどのように描くかというところが、作者の腕の見せ所であると考えられる。この作品では、まさに、こここのところがうまくいっているということなのである。

この作品には、他にも同じように平和な時期

の「四時のうつりかわり」が幾つか書き込まれている。例えば、春節、端午の節句、中秋節もある。もちろん、このような文章が書けるのは、この作者である老舎の筆力が素晴らしいというだけでなく、老舎が北京に生まれ育ち、この北京を知り尽くし、さらにはこの北京を心から愛しているからであることはもはや言うまでもないだろう。だから、この文章は我々の心を強く打つのである。

二

この表現手法は、修辞法の一つで、「対比」と呼ばれるものである^(註11)。この「対比」は、この作品を調べてみると、「四時のうつりかわり」の外にも、作品の様々な箇所に用いられている。

例えば、いくつかの場面に「往年(昔)」と「現在(今)」という言葉が使われている箇所があることから、そのことが推察できると思われる。以下の用例がその一つである。

日本軍が天安門広場で「保定陥落」記念行事を開催することにし、北京の各学校へその記念行事への学生参加命令を出す。その命令に応じ、中学校の事務員の瑞豊が、自分の学校の学生たちを天安門に連れて行くのである。学生たちは自分たちの国の一部が陥落したのに、これを祝う日本軍の行事に参加させられようとしている。非常に残酷な場面である。

この部分で対比が使われている。これをはっきり示すために、「現在」を表現している部分と「往年」を表現している部分とを区別して枠で囲むことにする。

この最大の屈辱は、甚だしきに至っては、十歳にならぬ子どもにさえ、沈黙をわからせ、その口は屈辱でしっかりと閉じられていた。車にも、電車にも、人力車にも、人家や商店にも、みな旗がたてられ、かざりがついていた。しかし、北平は死んだように

静かだった。一隊一隊と、うつむいて喋らない小学生が通りすぎると、この黙々たる隊列によって、すべての、まっすぐの通りは息を殺した。

かつては、北京の通りで二匹の犬が喧嘩していれば、大勢の人が集まってきて、取り囲んで見ていたし、或いは何人かは良いぞと声を出す人もいた。

今日は、道行く人はうつむいていた。店の内外に何ら賑やかさはなかった。学生たちの隊列の前にはラップも銅鑼もなかった。隊を引っ張る人は「一、二、一」と声を出さないだけでなく、笛も吹いてみんなの足並みを揃えさせることもなかった。みんなただ黙って、魂が抜けたみたいに、ゆっくりと歩くだけだった。隊の中に並んでいる者も左右を見ようとしなかったし、通行人たちも隊の方を見ようとしなかった。彼らは、今日はデモ行進といったものではないことがわかっていたし、みんなが初めて正式に敵に会うのであり、正式に敵が北京の主人であることを認めることを知っていた。

路上の人はみんなわかっていた。**以前**の学生のデモ行進はほとんどが悪勢力に対して反抗を示すものであった。彼らは時には学生の意見に賛同したし、またある時には学生たちの振る舞いに不満だった。だが、どうであれ、彼らは、学生たちは反抗することができるし、大騒ぎすることができる、新しい国民であり、新しい力を表わすものであることを知っていた。

今日は、学生たちはむしろ天安門に投降しに行くのであり、彼ら自身はまさしくその学生の父兄なのである^(註12)。

よく分かる。この表現法を単純化すればまさに**現在**⇔**往年**という対比の形に収束させることができる。さらに多くの、対比が使われている部分を色分けすれば、老舎の「対比」の使い方がもっと鮮明に浮かび上がるだろう^(註13)。

このような表現は、非常に絵画的であるといえる。「往年」の北京を描いた絵と「現在」の北京を描いた絵画を同時に並べて読者の前に提示していると考えればいい。客観的な事実を突きつけられ、どうしても反駁できないような、そんな説得力が生じているように思われる。

そして、この表現によって、読者は必然的に日本軍の残酷さ、不当さ、或いは戦争という破壊行為に対するやりきれなさを思うのである。

三

次に、登場人物の描写を見て行こう。この作品の作者の登場人物の描写が、非常に独創的であると思われるからである。

特にある特定の人物の行動、言動の描写に「笑い」をねらった表現があり、これが不思議な効果を上げているようにみえる。そこで、この部分がどのように表現され、どのような効果を上げているのかを検討してみたい。

その前にまず、登場人物の作品世界での配置、ストーリーの中での動きを把握しておく必要があるだろう。

この時期の北京は、城壁に囲まれた都市であった。だから、人々は北京の中に入るにも北京から出るにも、城壁にある城門を通っていかなければならなかった。北京が日本軍に占領された後には、その城門には日本の軍人が立っており、一般の人々の出入りを厳しく監視していた。このため、中国の人は北京に入るのも容易ではないが、また一方では、北京を脱出することも非常に難しいのである。

また、北京の人々は外から運び込まれてくる食料によって生活しなければならない。そこで、もし食料を運び込む商売人たちや近郊の農民が

ここでは **現在** → **往年** → **現在** → **往年** → **現在** というふうに描写が展開されているのが

城門から北京に入ってこなければ、北京の住民はたちまち飢えてしまうことになる。北京のこのような一面を見ただけでも、北京の住民が、日本軍の統治下の北京で、しかも日本軍に反抗し、日本軍の施しも拒否して生活して行くことがいかに困難であるか、いくらか想像できるのではないか。

この『四世同堂』の舞台の中心は、北京でも、長安街と西単の交差点からを北上し、その通りから少し入った、護国寺付近の小羊圈というところである。瓢箪状の小さい胡同である。ここにも様々な家があり、いろいろな階層の人物たちが住んでいる。車引き、巡査、床屋、担ぎ屋、芸人、商人等から教員、大学の教授、老人、子どもにいたるまで多種多様である。さらに彼らの友人知人がいる。彼らは農民であり、警察官である。作品ではこれらの人々にも焦点を当てることになるので、結果的には、単に主人公だけではなく、これらの多くの人物たちの目を通して日本軍占領下の北京が多面的な角度から描き出されることになる。

この作品に登場する人々は、彼らの思想、行動という点から分別でき、まず、二つのグループを取り出すことができると思われる^(註14)。

(1) 日本軍に占領された後、日本軍の統治に積極的に協力する。所謂「漢奸」ということのできる人々である。彼らは北京を占領している日本軍の力にすり寄り、その権力を寧ろ積極的に自分たちの便宜のために利用する。この結果、日本軍の占領下では、軍に虐待、搾取される人々を尻目に、日本軍の援助を受け、羽振りの良い生活をする事ができる。もちろん住民には激しく恨まれているが、日本軍に守られ容易には手を出せない。

(2) (1)とは正反対のグループである。日本軍には真っ向から抵抗し、あらゆる手を尽くし日本軍を攻撃、殺害しようと試みる。中には北京を脱出し中国軍の合流することを試みる人物もいる。

この場合、当然ながら、日本軍は「悪」であ

り、逆に、中国軍の方は「正義」である。したがって、この作品は、形としては、「正義」が「悪」を懲らしめる勧善懲悪形の配置になっているということもできるかもしれない。

さらに、この(1)と(2)の二つを極にして、その間に、あたかも電子のような形で大勢の人がいる。これらの人々が三つ目のグループを形成している。むしろここに属する人々が圧倒的多数と考えて良いだろう。これらの人々は、北京が閉ざされた都市であるということもあり、日本軍の占領の影響をもろに受けることになる。商売ができない、仕事ができない、生活物資が入らない等で生活が立ちゆかなくなっていく。また、思わぬ形で直接日本軍の暴行を受けることもある。このため、北京に住む人々の多くは心の中では日本軍に強い怨みを持ちながらも、実際には、いろいろな理由から、直接日本軍を攻撃することもなく、むしろ日本軍の理不尽と思われる命令にも従いながら生活しているのである。

この作品の主人公の祁瑞宣もこのような人々の中の一人と言って良いだろう。瑞宣は中学校の教員で、英語を教えている。

この瑞宣の祁家は、ここの胡同では一番古い「四世同堂」の家である。「四世同堂」とは四世代同居の家族形態のことであるから、祁家はつまり一つの家に祖父さん、父、子供、孫が一緒に暮らしているのである。

祖父は「祁老人」という呼び名で登場する。父は「祁天佑」、母は、作品ではもっぱら「天佑太太(奥さん)」と呼ばれ、病気がちで家にいて床にふせっている。父は呉服店の、雇われ店主である。天佑の長男が瑞宣である。瑞宣は三人兄弟。二番目が瑞豊、三番目が瑞全という。瑞豊は中学校の職員、瑞全は卒業目前の大学生として作品に登場してくる。瑞宣と瑞豊にはそれぞれ妻がいる。瑞宣の妻が韻梅、瑞豊の妻が玉珍である。瑞宣には子供が男女二人いて、上の男の子は小順兒、女の子は妞妞という。父親の天佑はほとんど店にいて、家に戻ることがない。こ

のためこの祁家は実質的には瑞宣が支え、家の切り盛りは彼の妻である韻梅が行っている。

「四世同堂」はもともと中国では理想的な家族形態と考えられていた。一家繁栄の象徴なのである。ところが、日本軍が北京を占領したことで、この繁栄の象徴が破壊されてしまう。「四世同堂」であった家族が一人また一人と欠け、この家族形態がしだいに崩れ去って行くのである。

四

この作品の多くの登場人物の中でも、この「四世同堂」である祁家の三兄弟に注目してみることにする。

この三兄弟は、それぞれの思想、行動がはっきり描き分けられている。前述の登場人物の分類で見れば、次男の瑞豊は(1)に入り、三男の瑞全は(2)入ることになる。

主人公である、長男の瑞宣は気持ちとしては瑞全と同じような行動をとりたいと思っている。だが、彼は祁家の長男であり、実質的には家族を支えているので、もし彼が瑞全と同じような行動をすれば、家族は支えを失い飢え死にすることになる。この理由から、どうしても北京に残らざるをえないのである。

三男の瑞全は大学卒業を目前にした学生であることはすでに述べた。彼は日本軍が北京に入ってくるとすぐ北京を脱出して中国軍に参加しようと行動し始める。だが、北京駅はいうまでもなく、北京の城門を出て行くのも難しく、悶々とした日々を送っている。ある日、瑞宣の手配で、日本軍に余り取り調べられることのない葬式の行列に紛れ込むことができ、やっと北京脱出に成功する。

一方、瑞宣は次男の瑞豊にも北京脱出をすすめる。ところが、彼の方はこのことを拒み、北京から離れようとしなない。そして、ついには「漢奸」の道を歩くことになってしまうのである。

すでに述べたように、この作品の登場人物は

大まかに三つのグループに分けることができる。祁家の三兄弟は、その三つのグループのそれぞれに一人ずつ入ることになる。こういったことから、三兄弟のそれぞれをとりあえず、三つのグループの典型と考えて、その描き方を観察することは、作品全体を理解する上から、有効であると思われる

まず、瑞全と瑞豊の考え方、行動が正反対になっていることに注目してみたい。

同じ兄弟でありながら、何故このようになってしまうのか。この二人を分けるのは何なのか。どうして瑞豊だけが漢奸の道を歩くことになるのか。

以下、瑞豊が漢奸の道を選択する場面から、この問題の一端を窺ってみることにする。

五

「漢奸」とは一般に日本の中国占領政策に協力する人物を指す。中国側からすれば、祖国を裏切る行為である。この作品でも、日本軍が裏から手を回して作った政府、これを偽政府と呼ぶが、この偽政府の要人になる、または、その偽政府機関の役人になる、或いはそういう役人の手先になるといった者まで、様々な「漢奸」が描き出されている。

瑞豊も、そのような漢奸の一人で、偽政府の教育局科長の道を選ぶのである。

教育局科長になる経緯を、瑞豊は自ら次のように説明している。

瑞豊の妻の実家の叔父が偽政府の教育局長になった人物と親密な仲であり、教育局長に叔父が教育局の役人になることを要請された。しかし、その叔父自身は役人になる意志はなく、就任を辞退した。そのかわりに瑞豊を教育局に推薦したのである^(注15)。

また、瑞豊は以前から収入の多い職に就いたら家を出ようと考えていたこともあり、たちどころに祁家から出て行く。

この件で、三男の瑞全に続いて、また「四世

同堂」から一人欠けるのである。

以下は、自分の家に来た瑞豊に、瑞宣が偽政府の役人にならないように説得する場面である。それに対する瑞豊の反応を見てみよう。なお、「老二」とは瑞豊のことである。

瑞豊は馬褂の襟を引っ張り、怒りを抑えて、答えた、「当然ですよ！科長は随意に路で拾えるものではないですから！」と。／「お前は知っているのか、それが漢奸であることを？」瑞宣の目は老二をしっかりと見つめていた。／「漢——」老二は確かにこの問題を考えたことがなかった。口を開いたまま、三十秒ほど何も言わなかった。ゆっくり唇をあわせ、すぐに、脳味噌の中に老大に反駁するに足るものがあるかどうか搜した。ちょっと考えて、「科長——漢奸！二つは絶対に一つに繋げることのできない名詞です！」ということを目指し、すぐ口に出した。／「それは平和な時代のことだ！」瑞宣は指摘した。「現在は、何をするにしても、我々は少し考えなければならないのだ。北平は今日日本人に占領されているのだから。」⁽¹⁶⁾

この作品では、「教育局科長」というポストは大喜びして飛びつくほどのものではないという方向で出されていると考えるべきであろう。少なくとも役職の中では最も低いもので、小さな官職なのである。しかし瑞豊にとっては違う。とてつもなく高い役職なのである。だから、大喜びで飛びついたのである。

この場面で問題になっているのは、瑞豊は「教育局科長」のポストに目が眩んだという点はあるにしても、注意すべきは、むしろ彼が日本の占領がどういうものであり、この占領下の北京にどういうことが起こっているのかを本当に理解していない、ということなのである。

日本軍がこの北京で何をしようとしているのか、或いは、この占領下の北京にどういうことが起こっているのかといったことは、特に占領

下では、人々が必ず知っておかなければならないことなのである。この知識が瑞豊に全く欠けている。だから、瑞豊にとっては、「教育局科長」になることがどうして「漢奸」なのかも本当に理解できず、罪の意識がまるでない。それどころか、却ってうれしくて天にも昇る気持ちなのである。

この場面での「笑い」は「教育局科長」というポストに対する良識ある読者と瑞豊自身との評価の違いに生まれていると考えてよいだろう。このポストは、客観的に見れば、そもそも官位としてはそれほど高いものとはいえず、しかも、そのポストに就くことは中国人としては明らかに売国的行為であり、寧ろとても恥ずかしいことなのであるが、瑞豊本人は、心の底から、このポストは官位がとてつもなく高いものであり、この官職に就くことは人間としてとても名誉であると考えているのである。この差異が可笑しいのである。

また、その小さな官職に、本人が猛烈な勢いで飛びつくその反応の速さ、その時の格好そのものにも「笑い」はあるだろう。しかも、客観的には本人にはそもそも役人になれるような学力も能力もなく、この「教育局科長」就任に関しても却って周囲の人々からひどく軽蔑されているのに、本人はいかに名誉で高いポストの役人になったかのように、周囲のものに対して急に威張り始めるところにも可笑しさがある。

これが作者の瑞豊の描き方の基本である。この描き方は、従来の「ユーモア」作品の登場人物を彷彿させる⁽¹⁷⁾。瑞豊は実際に「漢奸」であるから「悪人」なのである。だが、瑞豊に得意はあっても悪意はない。ただ余りにも無知で、本能に近い欲望を満足させることに忠実なだけなのである。

瑞豊が「教育局科長」になったことを喜べば喜ぶほど、偉そうにすればするほど、彼が中国人として、北京人として、或いは人間として持っていなければならないものの「欠如」が鮮明に浮かび上がる描写になっている。

ここにおいて、「無知」な人物たちは実は恐ろしい存在であり、占領という極限の状態では、平気で人々を苦しめる側に立つようになってしまうとの作者の警告が明らかになる。

どうしても瑞宣の言葉に納得しない瑞豊に対しさらに言う。

「現在、お前がおおいに喜んで、日本人が派遣した局長の下で仕事をし、それも行政上の仕事をするなら、お前はすでに日本人に投降したことになる。今日、科長になるなら、明日には恐らく局長になることも拒絶するはずはない。お前の心がお前の忠と奸を決めるのであって、むしろ、必ずしも官職の大小にあるのではない。老二、私の言うことを聞いて、お前の奥さんを連れて逃げ出し、清廉潔白な人間になってくれないか！」^(註18)

瑞豊が教育局科長に就任するという事は、日本の占領政策に協力するという事である。新聞で名指しされ批判されることはないけれど、トップの局長の漢奸行為となんら変わることはない。こう瑞宣は瑞豊に述べている。ところが、このような非常に簡単な道理が瑞豊には、決して誤魔化しや冗談ではなく、本当に理解できないのである。

では何故このようなことが起こっているのだろうか。

それは、瑞豊が、人間として、中国人として当然身につけていなければならないものを身につけていないからであり、そのため、瑞宣の言っている内容が本当に理解できないと、理解すべきなのである。

そして、その、身につけていなければならないものは、ここでは、人間として、中国人として、日本軍に絶対投降しないと、日本軍のためになるような仕事は一切しないという態度、精神というものであるといえるだろう。

彼（兄の瑞宣…筆者）は、理屈からして、お

おいに喜んで自分の幸運と前途を祝ってくれるのが当然である。どうしてくどくど漢奸のことを言うのだろうか。彼（弟の瑞豊…筆者）の心は乱れた。結局兄の言っていることがどういう意味なのかを、正確に推し量ることができなかった。彼はもう尋ねなかった。彼がただ推測できたことは、瑞宣の学問は彼よりも優れているのに、むしろ官に就くことができないから、きつといくらか嫉妬しているのだ、ということだけだった。嫉妬したかったら嫉妬すればいい。自分は運が良いのだ。彼は立ち上がって、…（略）…偉そうにして出ていった。すでに兄の言うことは十分に理解することはできなかったが、また兄の嫉妬を抑えるのに適当な方法のようなものも探し出せなかった^(註19)。

兄の瑞宣は「教育局科長」になることは「漢奸」になることであり、恥ずかしいことだから、「教育局科長」になるべきではないと弟の瑞豊に言っている。しかし、一方の弟の瑞豊は、この兄の忠告を、兄は自分より学問は上なのに「教育局科長」なることができないので、自分に嫉妬して、何やかやと難癖を付けていると考えているのである。この兄弟の気持ちのすれ違いにも「笑い」が生じるだろう。

ここにも、瑞豊に根本的に欠けているものが見える。

瑞豊は兄弟の情、或いは兄への優しさというものが分からないのである。だから瑞豊には瑞宣の言葉の真意が理解できない。なぜなら、この言葉は兄の優しさから出た言葉だからである。

平和な時代では、この兄弟の情というのはそれほど問題にされることはなかった。だから、その時代には、瑞豊にこのような情が育っているかどうかも分からなかった。しかし不幸にも日本軍による北京の占領という極限の状態が出現し、この状態によって兄弟の情のあるなしが問題になる局面が表れ出たのである。ここではじ

めて瑞豊が兄弟の情を理解できない人物であるということが判明したのである。

六

ここに来て瑞豊がどのように描かれているかかなりはっきりしてきたように思われる。いくらか繰り返しになるが、ここにもう一度まとめておこう。

ここに描かれている瑞豊は、実は、中国人として、北京人として、或いは人間として持っていなければならないものが欠如している人物なのである、といえる。

この「中国人として、北京人として、或いは人間として持っていなければならないもの」を、とりあえず「大事なもの」という言葉で表現するとすれば、瑞豊はまさしくこの「大事なもの」が欠けているというふうな人物なのである。

もちろんその「大事なもの」というものもたくさんある。戦時下における中国のことをちゃんと理解しているかどうか、中国人として日本軍を撃退しようという気持ちがあるかどうか、中国人として日本軍のためになるようなことは絶対にしないという気概があるかどうかといったこと等が、それに当たる。

だから、つまるところ、漢奸になるかならないかの分かれ目は、その人物が「大事なもの」を持っているかいないかなのである。「大事なもの」を持っている人間は決して漢奸にはならないし、持っていないものは容易に漢奸になってしまうのである。

だがこの「大事なもの」の存在は、平和な時期においては、あまり問題にされることはなかった。だからこれまで、例えば瑞豊が「大事なもの」を持っているかどうか確認されることはなかったし、できもしなかったのである。しかし、戦時下の極限状態においては、これがあるかどうかは極めて重要なものになってきた。こうなって初めて瑞豊に「大事なもの」が欠如しているという事実が浮かび上がってきたのであ

る。

また厄介なことに、この「大事なもの」を持っていない人物は、自分たちが何をやっているのか気づくこともないし、そもそも自分が悪いことをしていると思っていない。だから、いつもにこにこと隣近所にいて人の迷惑も顧みずに困ったことをする。

この作品では、日中戦争であるから、日本軍は「悪」であり、中国軍が「善」であるという動かしがたい座標がすでに設定されている。

この座標から述べれば、日本軍が北京を占領するという状況において、「大事なもの」を持っていない人物は、「悪」の傘下に容易に入ってしまう。それは、日本軍が権力を握っており、「大事なもの」を持ってない人物は、「大事なもの」を持ってないが故に、「権力」の方に驚くほど簡単になびいて行ってしまう性質があるからである。この結果、恐ろしいことに、日本軍に抵抗する「善」を陥れたり、圧迫したりする。そして、ある時には、彼らのために「善」の命が奪われることも起こりうる。

この作品には、このような局面が老舎の「ユーモア」の筆で鮮やかに描き出されていたのである。

七

この作品の「漢奸」の代表格は大赤包、冠曉荷であろう。さらに、「漢奸」の描き方を確かめるために、「漢奸」の大赤包、冠曉荷を取り上げてもう少し見てみよう。

大赤包と冠曉荷の夫婦は、祁家と同じように、小羊圈に住んでいる。冠曉荷は清朝時代に、それほど位は高くない役人をしたことのある人物である。冠曉荷の妻の方は、この作品では一貫して「大赤包」という綽名で登場している。冠曉荷にはひとり、もと芸人だった妾、桐芳がいる。また、娘が二人いて、上が高第、下が招弟という。

大赤包と冠曉荷は日本軍が北京を占領したこ

とを、自分たちが役人の座を獲得する好機と捉えている。彼らは中国の伝統的な「昇官発財」、つまり、役人になり、お金を儲けることを人生最大の成功であると考え、しかも、「昇官発財」を信奉する人がしばしばそうであるように、彼も、この考え方は決して悪いものではなく、むしろ真理と考えている。

次の場面は、大赤包が特務の責任者の李空山から推薦される形で売春婦検疫所の所長になった時のものである。

大赤包は部屋の真ん中に座っていた。音が屋根の瓦を震わせるような咳、談笑。呼吸の音さえも拡声器から出てきたようだった。東陽が入ってきたのを見ても立ち上がらなかった。ただ勿体ぶってうなずいただけだった。そのあとで、半斤の白粉を擦りつけた手を椅子の方に向けてちょっと振って示し、客に座るようにすすめた。彼女の貫禄の大きさが娘にはお母さんと呼ばせず、夫には妻と呼ばせず、どうしても所長と呼ばなければならないようにした。東陽が座るのを見て、彼女は喉をどのように調整して良いか分からなかった。いくらか声を出すのが大儀なように、或いはまた非常に権威があるかのように、いくらか痰が絡んでいるかのように、しかし、声にはまたとても重量感を込めて、怒鳴った。「誰か！ お茶を！」^(註20)

「売春婦検疫所の所長」は売春婦の管理であり、客観的に見れば、決して名誉なポストではない。だがこれも「役人」である。大赤包はまるでどこかの大役人にでもなったかのように、得意になり、急に周りの者に対して威張り始めたのである。この大赤包の急変ぶりが誇張され、滑稽に描き出されている。

ここで注意したいのは、権力は中国政府から日本軍に移っているのに、奇妙なことに、この偽政府の中に、かつての「清朝」時代の役人がいるという事実である。彼らは清朝の時も、こ

のよう役人をやってきたし、日本軍の下でも、同じように役人をやっているのである。

彼らにとっては、誰が作った政府の役人であろうが、つまり中国政府の役人であろうが、日本政府が作った役人であろうが、役人に変わりはない。ともかく役人になれさえすればよいのである。だから、たとえどのような役人であったとして、役人になれば、そのことを天真爛漫に喜び、役人にしてくれた日本人をさえ無邪気に崇め始めるのである。

このとき、役人とは単に金を儲けるための道具なのである。

これが「昇官発財」の正体のひとつである。

さらに、大赤包が、家族、友人の前で演説する。この演説内容の一部が以下である。

「東陽、あなたは新民会にいる。瑞豊、あなたは教育局に入った。私は、小さな、あるところの所長になった。晁荷も、長くしないうちに地位を得るでしょう。私たちの誰よりもっと高い地位を、です。この王朝交代の時代にあつて、私たちのこの出だしはなかなかのものです。私たちは団結し、お互いに助け合い、面倒を見合い、順調に我々の天下をうち開き、私たちの一家のそれぞれの人に仕事を与え、権力を持たせ、財産を持たせなければなりません。日本人はもちろん一番良いところを取ります。私たちの親戚、妻さえも、みな第二番のものを取らなければならないのです。我々は心を合わせ努力して一つの勢力を作り、あらゆる人に、甚だしきに至っては、日本人でさえも、我々の言うことを聞くようにし、最も良い物を我々に捧げさせなければなりません。」^(註21)

東陽という人物も「漢奸」の文筆家で「新民会」というのは日本寄りの文芸協会の組織という事になっている。

役人の世界はコネの世界であり、お互い利用し合って生きている。だから、お互いに団結す

るといっても、決して人のためではなく、自分のために団結して欲しいということなのである。そして、みんなが役人になることで社会の利益をすべて自分たち一族、仲間が独占すると述べているのである。

後に、大赤包は売春婦検疫所の所長という地位を利用し、売春婦の元締めのようなことをする。日本軍の占領下の北京で売春業は繁盛し、大赤包たちは売春婦からお金を巻き上げること、しだいに財を築いて行くことになる。

やがて、まるで「西太后」のような、最高権力者として振る舞いを始める。

自分の家を事務所に使うことに決めた。彼女は桐芳に瑞豊が嘗て住むことを望んだ小屋に引っ越すように命令した。桐芳の部屋を第三号応接間に改めた。北の部屋が一号であり、高第の居室が第二号であった。おおそ貴賓と一等妓女は第一号で自分が接待した。…(略)…第一号応接室にはいつも麻雀テーブルがおかれていた。麻雀、ポーカー、サイコロ賭博、花札はお客がやりたければいつでもやれた。遊びの時間と掛け金の大小は無制限だった。ただしどんな遊びにかかわらず、一律に「テラ銭」を取り立てた。…(略)…二号、三号のお客が余りに騒ぐと、彼女は大砲をぶっ放すような咳払いを一つ二つして、彼らを静かにさせた。彼女がもし疲労を感じると空襲警報が鳴るような欠伸をして、お客をお辞儀退出させた。／部屋に座り飽きると、彼女は各部屋に行き戦艦の艦長のように巡閲した。二三等の客はそこでやっと彼女に来意を述べる機会を得ることになる。彼女が頷けば「良い」ということであり、彼女が顔をしかめれば「まあ良いだろう」であり、彼女は何の表情も示さなければ「駄目」ということだった^(註22)。

この場面からまた、いくらかの事実を読みとることができる。

ひとつは、この場面は、売春婦検疫所が腐敗しているということである。売春婦検疫所は、日本軍統治下の政府ではあるが、形式的には「公」であるので、明らかに「公」と「私」の混同があり、麻薬喫煙、賭博行為も行っており、政府機関としては、ひどく腐敗しているといえることができる。

もう一つはこの売春婦検疫所という機関が本来の機能を果たせなくなっているということである。この状態であれば、恐らく娼婦が梅毒であるのかどうかの正確な判定はどこにも存在しないと考えて良いだろう。なぜなら、その判定に絶えず金やプレゼントが絡んでいるはずだからである。

八

もしお金を儲け、良いものを食べ、良いお酒を飲み、良い服を着て、遊び暮らすことが人生の勝利者の証であるならば、間違いなく大赤包は勝利者であるといえることができる。

特に日本の占領の影響で、北京の多くの人が食糧不足で食べるものもほとんどなくなっているのに、彼らのところには、食料があるばかり、酒もあり、さらには美しい服で着飾り、遊び暮らしているのである。

このことを、作者は子どもの目を通し、最も羨ましい家族として表現する。この子供は、皮肉なことに彼らに批判的な瑞宣の子ども、小順児、小妞である。

最も彼らを羨ましがらせたのは冠家だった。あそこはなんてすごい正月を送っているんだ。お母さんが注意してないときに、彼ら二人はこっそり家を抜け出して、冠家の入り口で大騒ぎを見た。わあ、たくさんのきれいなお姉ちゃんたちがやって来た。みんなきらきらと美しく着飾っている。小妞子はぼかんと見とれ、口を開けっ放しにして、長い間閉じることはできなかった。彼女たちはきらき

らと着飾っているばかりか、頭と顔もきれいに化粧していた。しかも彼女たちは非常に活発で、大きな声で話したり笑ったりしていた。少しもお母さんのようにしかめ面をしていなかった。彼女たちが冠家に来たときに、手の中に必ず贈り物を持っていた。小順子は人差し指を口にくわえ、立て続けに息を吸っていた。小妞子は「一、二、三」と数えていた。彼女の心の中の最大の数字は「十二」だった。すぐに「十二本の瓶、十二包みのお菓子、十二個の箱」を数えることになった。彼女は思わず意見を発表した、「彼らの年越しには、たくさんのおいしいものがあるわ。」と^(註23)。

節句になると、また子どもたちを羨ましがらせる。冠家の買い物は祁家とは全く違うのである。

小順兄の小さな口は母親にひどい耐え難さを与えた。「お母さん、節句には新しい服を着るんでしょう。粽を食べるんだよね。額には王の字を書くのよね？お母さん、町に行って肉を買おうよ。あの冠の家はたくさんのお肉を買ったし、それに魚もだよ。お母さん、冠家の入り口には鍾馗さんの絵がはってあるよ。信じないなら見に行ってきたよ。」^(註24)

子どもたちが冠家を羨むのは、子どもたちが、「中国人として日本人に反抗すること」「中国人としての節を守ること」は大事であり、この大事なことを行うためには「着るもの」「食べるもの」を我慢しなければならないという道理がなかなか理解できないからである。この点で、子供たちの考え方は大赤包たちに近いといえる。

つまり、大赤包も、この子どもたちと同じように、やはり「中国人として日本軍に反抗すること」「中国人としての節を守ること」が大事であるという考え方がまるでなく、ただ「良いものを食べたい」「綺麗なものを着たい」という欲望に忠実に生きているだけだということにな

る。この点でまさしく子供と同じなのである。

だが、これではまだ、大赤包の考えをすっかり理解したことにならない。大赤包たちの考えは、中国人でありながら日本人に平気で仕えるというように、まるで節操がないように見えるが、実はそうではない。これには一定の法則がある。

彼女たちが「節」を守る相手は、実は、「その時最も強い権力を持っている勢力」であるということなのである。

清朝が「権力」を持っていたときには清朝であり、民国政府が「権力」を持っていたときには民国政府であり、そして、日本軍が北京を占領した現在にあっては日本軍なのである。必ずしも「中国」「中国人」にこだわらないだけなのである。「中国」「中国人」に何の意味も見出していないのである。

実はこの考えこそが彼らの「昇官発財」なのである。「役人」になれば、その政府が持っている「権力」を使うことができる。その「権力」が欲しいのであり、その「権力」を使ってお金をもうけたいのである。そして、その「権力」で得たお金を使って「良いものを食べ」「綺麗なものを着る」のである。

今、日本占領下の北京において、自分たちが望んだとおりに「役人」になれた。狙いどおり「権力」を行使する側に立つことができた。この結果「良いものを食べ」「綺麗なものを着る」ことができている。だから彼らはこの北京で最も成功しているのである。

九

さらに、この作品では、日本軍の中国統治が如何に愚かなことであるかが描き出されていることも知らねばならない。

大赤包らの描き方から、以下のようなことが読み取れる。

一つは、彼ら漢奸は「日本軍」に集まってくるのではなく、日本軍の「権力」に集まっ

てきている、ということである。したがって、日本軍が一旦「権力」を失えば、日本軍にまさる「権力」の保持者にすり寄りことは目に見えているし、さらには、恐らくその権力保持者のために極めて残酷に「日本軍」を攻撃する可能性を持っている。これは、彼らが「日本軍」が「権力」を持った途端、あるいは「中国」が「権力」を失った途端、「中国」を捨てたという事実から十分に予想できると考える。

二つは、大赤包のような漢奸は権力に寄生し、そこで内部からその組織をだめにして行くということである。彼らが、役人を金儲けの地位と理解し、役人をやることで、腐敗が起り、公私混同などは当たり前になってしまう。この結果、彼らが以前清朝をだめにしたように、今度は日本軍を根っこの方からだめにして行くだろうことが予想されるのである。

三つ目は、どのような政府であれ、大赤包のような人物を採用したものは必ず住民から反発されることになるということである。少なくとも中国の人々は、この大赤包の売春婦検疫所のみならず、しだいに政府そのものを全く信用しなくなってくるだろう。さらに、政府を信用しないばかりか、攻撃さえし始めるのは目に見えている。大赤包のやり方は、必ずこういう事態を引き起こすことになるはずである。

日本軍はこのような漢奸たちを抱え込んで中国を統治しようと考えたのである。

作者は、このような描き方で、日本軍のやり方の無謀さ、愚かさを描き出しており、日本軍を嘲笑さえしていると考えても良いだろう。

また、大赤包たちは、中国人の目から見ても厄介な存在であることはもういうまでもない。作者は、銭黙吟という老人の口を借りて、大赤包について以下のように述べている。

今回の戦争は中華民族の大掃除であるべきである。一方では、敵を追い出さなければならないし、一方では、自分たちのゴミ箱のゴミをきれいに取り除かねばならない。我々の

伝統的な昇官発財の観念、封建思想——これはまさしく一方では高官になりたいと思い、一方ではまた奴隷になることに甘んじることである——家庭制度、教育方法、そして目先の安逸をむさぼる習慣、これらはみな民族の伝染病である。これらの病によって、国が太平の頃は、まるで老牛が前の方にのろのろ足を引きずって歩いているみたいに、歴史は声も色もなく、平凡なものになってしまった。我々の歴史には、全世界を照らすような発明、貢献が少しもない。そして、今度、国家が存亡の危機に遭遇して、これらの病気は第三期の梅毒のように、瞬く間に全身を腐らせてしまった。大赤包たちは人ではなく、民族の悪性腫瘍であり、ナイフで切る取るべきである。ただ善し悪しを知らない、気にかけるほどのことのない小さい虫だけであるから、そのままほったらかしておけばいいなどと考えるはいけない。彼らは蛆なのだ。蛆は蠅に変わるだろう。その蠅はやがて悪い病気を撒き散らすことになる。今日において、彼の罪は日本人と同じように多く、同じように大きい。だから、彼らも殺すべきなのである。」^(註25)

中国側は、日中戦争を中国の大掃除の機会と捉え、大赤包らはゴミであり、中国から取り除く対象であると述べているのである。

この点からも、日本軍が大赤包らを自分たちの組織に入れたことが、いかに愚かで、無謀なことであるかが理解できるのではないか。

なお、大赤包のような人物たちは、おそらく、どのような政府でも食い物にして逞しく生きて行けることができるはずであった。しかし、日本軍は彼らが食い物にするには余りに狂気であった。結局、日本軍は驚くほど日本軍に忠実であった大赤包たちをも殺してしまうのである。

おわりに

この『四世同堂』は「明」と「暗」, 「笑」と「悲」が交錯した作品である。今回の作品分析は, どちらかというところ, 「明」と「笑」の方に注目したことになる。

「明」というところでは, 作品の「四時のうつりかわり」の描写である。この部分を取り上げ, 老舎の「対比」の妙を考えてみた。老舎はこの作品で「対比」を多用しているし, それがうまく行っている^(註26)と考える。

また, 「笑」という点では「漢奸」の描き方に注目した。

この『四世同堂』を「ユーモア」作品とさえいえる, あるいは非難されるかもしれない。だが, この作品をよく観察してみると, 確かに, 作者が明らかに「笑い」をねらっている表現がある。そして, その部分を検討してみると, 老舎の「笑い」を醸し出す筆でしか表出できないであろう「漢奸」の複雑な局面が描き出されていることがわかる。だとすれば, この『四世同堂』をたとえば「ユーモア」作品と呼んだとしてもあながち見当はずれとはいえないのである。

いずれにしろ, 今回のこの小論で, 『四世同堂』が老舎独特の筆使いによってできあがっていることはいくらか明らかにできたのではないかな。

もちろん, 今回の考察は, 『四世同堂』の, ほんの一部を検討したにすぎない。そもそも作品そのものが大部で, 登場人物も多く, いろんな要素が含まれており, 簡単に論じ尽くすことはできない。さらに, 様々な方向からの分析が必要であり, またそれが可能でもある。さらに考えてゆきたいと思う。(完)

注

本論文のテキストは『老舎全集 4 四世同堂(上)』『老舎全集 5 四世同堂(下)』(人民文学出版社・1999)を使用した。したがって, ここで表記するページはこの本のものである。この『四世同堂』という作品は日本

語に翻訳されている。その翻訳本はいくつかある。筆者の手元にある二種類を紹介しておく。一つは『老舎小説全集第8巻 四世同堂(上)』『老舎小説全集第9巻 四世同堂(中)』『老舎小説全集第10巻 四世同堂(下)』(学習研究社・1982)であり, もう一つは『老舎著 四世同堂 第一部』『老舎著 四世同堂 第二部』『老舎著 四世同堂 第三部』(月曜書房・1952)である。本論考で参考にさせてもらった。

- (1) 老舎の『四世同堂』は『惶惑』『偷生』『飢荒』の三部作である。このうち第一部『惶惑』は1944年11月10日～1945年9月2日にかけて, 重慶の『掃蕩報』という雑誌に掲載され, 第二部『偷生』は1946年11月に, 『四世同堂』の二部として晨光文学叢書として出版された。そして, 最後の第三部『飢荒』は雑誌『小説月刊』の1950年4巻1期～1951年6期に発表されている。

このように, それぞれの作品の発表時期, 発表雑誌などが異なっている。なぜこのようなのか, 以下簡単に整理しておく。

最初の『四世同堂』の第一部『惶惑』は1944年に発表した。

この後, 1945年, 第二次大戦が終った直後, アメリカ合衆国国務院の文化交換計画の一環として, 劇作家曹禺と小説家老舎がアメリカに一年間招請されることになり, 老舎はこれに応じた。そして曹禺と共にアメリカに行く。一年後, 曹禺は帰国するが, 老舎はそのままアメリカに残った。次の『四世同堂』の第二部『偷生』の発表は1946年だから, 老舎のアメリカ滞在中に行われたことになる。

1949年中華人民共和国成立。老舎は周恩来の呼びかけに応じ, アメリカ滞中に終止符を打ち帰国の途に就いた。最後の『四世同堂』の第三部『飢荒』は中華人民共和国成立から一年後, 1950年の発表である。もちろん執筆そのものは, アメリカ滞在中にすでに終了していた。アメリカで翻訳した『四世同堂』は, 中国国内発表のもの前に出版している。

『四世同堂』には削除があった。中国国内で1950年に発表された第三部は老舎自身が元の作品の一部分を削除していたのである。長い間, その内容が不明のままだった。ところがのちに, 国内発表の第三部に無い部分が英語に翻訳されたものに残っていることが発見された。こうして, ようやく全体の形が明らかになったのである。今回使用した『老舎全集』のテキストは完全な形のものである。

なお, この削除部分については『老舎小説全集第10巻 四世同堂(下)』(学習研究社・1982)の「解説」の「破鏡再び合う——『四世同堂』末尾の消失と英語抄訳本からの重訳について——」(胡絮青・舒乙著, 日下恒夫訳注)に詳し

- い。
- (2) 『『四世同堂』と老舍』波多野太郎 (pp. 697-722, 横浜市大論叢 1-1・2・3)
- (3) 「ユーモア」については、拙稿「老舍『老張の哲学』私論」(集刊東洋学第五十七号) 拙稿「老舍『趙子曰』試論」(八戸工業大学紀要第9巻)「老舍『二馬』試論」(八戸工業大学紀要第10巻)等が、「悲劇」については「老舍『微神』と『月牙兒』の悲劇について」(東北大学中国語学文学論集第6/7合併号)等がある。
- (4) この作品に「笑い」をねらった表現があることは、実藤恵秀氏の次の感想でも知ることができる。「老舍は、ユーモア作家といわれているが、この小説では、そのユーモラスな筆を、漢奸すなわち賣國奴たちにむけている。大赤瓜・冠曉荷・祁瑞豐・藍東陽たち、大小の漢奸どもの、利己的で、みえぼうで、いばりやで、そのじつ、いつもおどおどしていること、かれら漢奸同志が、手をにぎっているかとおもうと、はいせきしあい、またもへいきで手をにぎりあうというみにくさ。老舍は、これを、おもいきり痛烈にかきながつてゐる。讀者は、そのたびに笑う。笑つたあとでは、いつまでも、あの漢奸どものまねは、どんなことがあっても、したくない、とおもわせられる。」(実藤恵秀著「あとがき」『老舍著 四世同堂 第二部』・月曜書房・1952)
- (5) この点については注(2)の論文で波多野氏も証言している。また、竹中伸氏も以下のように証言している。「日中戦争が勃発し、日本軍が北京を占領した後は、華北交通、興中公司、興亜院等々のいわゆる国策会社や国策機関が続々北京に進出設立され、これに伴って、軍関係をはじめとし、国策会社や各種機関の要員および、その家族、ならびにこれらに付随便乗して、一旗揚げることをもくろむ、ありとあらゆる種類の日本人が文字通り怒濤のごとく北京に押し寄せて来た。…(略)…幾十年間も二千五、六百人前後だった日本人居住民の数は、アレヨアレヨという間にたちまち一万を超え、五万人を突破し、敗戦直前にはなんと十万人を超過するという、真に驚異的、爆発的增加を見るに至った。…(略)…『四世同堂』はもちろん小説であって、単なる報告文学ではないことはすでに述べたとおりである。しかし、日中戦争の始まる以前から敗戦の翌年までズッと北京に居住し、外務省および興亜院の職員として直接間接に戦争に関係してきた私の経験からすれば、この作品に描かれているところは、少なくとも五〇%くらいは事実であって、当時の日本軍や心なき日本人が一般中国人の心に残した傷痕が、いかに深いものであったかを、改めて痛感せざるを得ない。」(竹中伸著「解説」『老舍小説全集第9巻 四世同堂(中)』・学習研究社・1982)
- (6) 『老舍全集 4 四世同堂』「32」「33」
- (7) 『老舍全集 4 四世同堂』「46」「47」「48」
- (8) 『老舍全集 4 四世同堂』「59」
- (9) 『老舍全集 4 四世同堂』「41」p. 503
- (10) 『老舍全集 4 四世同堂』「41」p. 507
- (11) 老舍の「対比」については、拙稿「老舍『老張の哲学』私論」(集刊東洋学第五十七号)で論じたことがある。
- (12) 『老舍全集 4 四世同堂(上)』「25」p. 279
- (13) すでに尾崎實氏は老舍の「対比」を指摘している。氏は老舍の文章に「仮定や反転をあらわす接続詞と疑問詞」が多く出てくることに注目し、老舍の文章を以下のように述べている。少し長くなるが主要なところを全部挙げておく。「わたくしの見方では・鋭い観察と鮮やかな描写とに必要な視点・観点を設定するためにあったと思われる。/そのわけは、老舍は「クッキリと描く」という時、自らの創作経験を通して、よく、美術界での用語「烘托」——違う色を周りに塗って、中心の物の形をきわだたせる——を使って説明するからである。/いま、この方法を、老舍文学に還元していうと、中心の物に当たるのは、もちろん、人間。絵筆はペンになり、絵具はその人にかかわるあらゆるすべての事柄となって、その人特有のことば・表情・起居振舞などを引きだすために、中心の周りでいろいろられるのである。/が、予期する効果を狙いながら、どこから絵筆を入れるのかについては、老舍独特のクセ・レトリックがあって、ここで選ばれたのが、「もしも〜なら」「たとい〜でも」「しかし」「だが」「だけでも」ということばであり、疑問文という感情表白の手段であった。/このまことに興味深い作法に備わる顕著な特徴は、中心に据えた人間だけに絵筆の重みがかかるのではなく、中心は、あくまで、周りとの対比で描かれるという点にある。/すると、対比が鮮明になされるには、どうしても、明確な視点が不可欠であり、しかも、対照の妙がある二種類が理想的なことは、もう、いうまでもない。/そこで、できたのが、仮定の接続詞がおおらかに誘いこむ未然形の世界と、反転の接続詞や疑問文がおりたたむように導く現実の世界との二つの観点で、ここからみつめる確かな眼と眼とが、うつつあい、一つになって、だんだんに、クッキリとした人間像が浮かび上がってきた時、われわれは、老舍文学から、深い感動を受けたのである。」(尾崎實著「老舍のすきなレトリック」『老舍小説全集』・学習研究社・1982・「月報9」)なお、老舍の「対比」については、筆者も注(10)の論文ですでに検討したことがある。
- (14) 拙稿「老舍『火葬』試論」(八戸工業大学紀要第

22 卷) pp. 70-71

『四世同堂』の前、1943 年に『火葬』という長編作品を発表している。この作品も戦争を描いており、作品の作り方も類似している部分がある。筆者は、この『火葬』を以前考えたことがあり、この際登場人物を三つのグループに分けた。この部分は、その論考のグループ分けの考え方をそのまま踏襲している。なお、『火葬』と『四世同堂』の関係については、のちに改めて論じてみたい。

- (15) 『老舍全集 4 四世同堂』「29」 p. 354
- (16) 『老舍全集 4 四世同堂』「29」 p. 359
- (17) 「ユーモア」による老舍の人物の描き方については、注 (3) の論文を参照して欲しい。
- (18) 『老舍全集 4 四世同堂』「29」 p. 360
- (19) 『老舍全集 4 四世同堂』「29」 pp. 360-361
- (20) 『老舍全集 4 四世同堂』「30」 pp. 351

- (21) 『老舍全集 4 四世同堂』「30」 pp. 354
- (22) 『老舍全集 4 四世同堂』「37」 pp. 449-450
- (23) 『老舍全集 4 四世同堂』「35」 p. 422
- (24) 『老舍全集 4 四世同堂』「38」 p. 463
- (25) 『老舍全集 4 四世同堂』「50」 p. 659
- (26) 前作『火葬』との比較はいずれ行わなければならないと考えている。この『四世同堂』と『火葬』の違いという点では、この「対比」表現を挙げることもできるかもしれない。この違いは、本論考から考えると、『四世同堂』の舞台が北京であり、『火葬』は舞台が架空の都市、文城であるというところにも関わってゆく。なお、老舍は、『火葬』の「序」で、作品が失敗作だと述べ、その失敗の一つに、舞台を文城という架空の都市にしたことを挙げている、のである。今後の課題としておく。